「本朝二十不孝」論
―「本朝二十不孝」の教訓性と戯作性―

三十四回生　岡田由美子

「本朝二十不孝」は、貞享三（一六八六）年十一月、井原西鶴四五才の作品である。五巻五冊、二十話から成る。

当時は、五代将軍綱吉の孝道奨励政策が盛んな時代であり、そのような時代思潮が、作者に本作品を書かせたことは間違いないであろう。

一体、西鶴は、孝道奨励政策をどのように受け止めていたのであろうか。又、「好色二代男」の跋文で「世の慰草を何かなと尋ねて」という自他共に認める戯作者西鶴が、「本朝二十不孝」において、読者を楽しませるためにどのような創作方法を用いているのかという点について考察してゆきたいと思う。

※

「本朝二十不孝」が書かれた貞享三年を逆のぼること四年の天和二（一六八二）年、将軍綱吉は、全国各地に、高札を建てさせた。

内容は、百姓や町人に対する禁令等が主であったが、その中に、

「忠孝をはげまし、夫婦兄弟諸親類にむつまじく、召仕の者に至るまで憐愍を加ふべし。若し不忠不孝の者あらば、重罪たるべきこと」[注一]と道徳的教訓が掲げられ、その点を指してこの高札は、「忠孝札」とよばれた。犬公方とまで異名をとった綱吉は、このように、さまざまな孝道奨励政策を展開したのである。

そこで私は、卒業論文において、いろいろな方々の説を検討し、この孝道奨励政策に対する西鶴の意識を考察したわけであるが、その中で最も注目したのが、谷脇理史氏の「翁問答」との比較であった。[注二]

「翁問答」は、儒者、中江藤樹（一六〇八～一六四八）の作であり、「孝経」の強い影響を受けている。谷脇氏が具体的に比較を行なったのは、「本朝二十不孝」序文と、「翁問答」の庶民の孝行について述べている部分である。それによると、中江藤樹の孝道観と西鶴の孝道観は非常に接近しているのである。

この事実から、西鶴は、少なくとも「孝経」の影響を受

けていたのではなかろうか。そうすると、同様に熱烈な、「孝経」の信奉者であった綱吉を批判する意図は全く感じられないのである。

以上から、孝道奨励政策に対する批判の意図はなかったと思われる。

それでは、その上で、読者に対する教訓性はあるのであろうか。私は、序文と本文に分けて、それぞれに考察することにしたい。

①雪中の筍、八百屋にあり、②鯉魚は、魚屋の生船にあり、③世に天性の外、祈らずとも、④夫丶の家業をなし、⑤禄を以て、万物を調へ、⑥教を尽せる人、常也、⑦此常の人、稀にして、悪人多し、⑧生としいける輩、孝なる道を知らずんば、天の咎を遁るべからず、⑨其例は、諸国見聞するに不孝の輩眼前に、其罪を顕はす、⑩是を梓にちりばめ、⑪孝にすゝむる、一助ならんかし

（番号は筆者記す）

右は、「本朝二十不孝」の序文である。ここで、番号で細かく分けた一文ずつの役割を考えてみたい。

まず、①～③は、「二十四孝」的な、天の力に頼る孝道を否定している。そして、④～⑥で、儒教思想による現実的な孝道観を説いているがその内容は、当時の人々ならば誰もが心得ているような常識であった。ここまでを見る限り、読者達を啓蒙教化しようとする西鶴の気負いは感じられない。

しかし、⑦の「此常の人、稀にして悪人多し」で、それまでの流れが一転するのである。「人間は欲に手足を付たる、物ぞかし」（諸艶大鑑）これが、本来の西鶴の人間観であった。孝道というのは、頭では理解できても、人間は本来欲深いものであるから、実行はなかなか難しい。また、それだからこそ、世の中に不孝者達が数多く存在するのである。

そして、⑧～⑪で、不孝者は必ず天罰を受けるのであると説き、その罪は、眼前にあらわれてくるものだから、それを述べて、「孝にすゝむる一助」にしようと思う。と解釈できる。つまり、序文を見る限り、ささやかながらでも教訓を行なおうとする西鶴の意識を感じることができるのである。

それでは、本文の方では如何であろうか。私は、本文の教訓性を考察するためにあたって、咄しの結びに使っている。いわゆる教訓的言辞に注目してゆきたいと思う。この教訓的言辞は、内容的に、

(イ) 不孝者の悲惨な最期について、こうなったのも全て、天の報い・罰であると結んでいるもの。

(ロ) 咄しについて、その感想めいた言葉で結んでいるもの。

(ハ) 西鶴自身の孝道観について触れているものの三つに分けられる。

まず、(イ)の天の報い・罰であると結んでいるものには、「世にかゝる不孝の者、ためしなき物がたり、懼ろしや、忽ちに、天、是を罰し給ふ」（巻一の二「大節季にない袖の雨」）、「己その弁あらば、かくは成まじ。親に縄かけし酬、目前の火宅。猶、又の世は火の車、鬼の引き肴なる

べしと、是を悪ざるはなし」（巻二の一「我と身を焦す釜が渕」）「この藤助が身の難儀は、皆親の言葉を背きし、罰ならん」（巻一の三「人はしれぬ国の土仏」）がある。

先に私は、西鶴は、天の力に頼る孝道を否定していると述べた。しかし、これらの話は天罰を受けており、矛盾しているように思われる。だが、これは仏教の「因果応報」の思想なのであり、天の力にのみ頼る二十四孝的孝道に対する批判と「因果応報」との思想は相入れないことはないのである。

以上から、これらの言葉に教訓性を認めて良いと思われる。

次に(ロ)の作者の感想めいた言辞の教訓性はどうであろうか。

「欲に目の見えぬ、金の借手は、今思ひあたるべし」（巻一の一「今の都も世は借物」）「無用の道心、何の見付所もなく、導き事とも弁へず。無我無分別の発心。親に思はざる外の気を悩ませ、是兢なき不孝坊といへり。」（巻一の四「慰み改て咄の点取」）「おのれ出れば、子細なくたすかる親を、これ、ためしなき女なり、と憎まざるはなかりけり」（巻二の二「旅行の暮の僧にて候」）

これらに共通しているのは、不孝者についての感想というよりも、社会に対する批判に移行していることである。「今の都も世は借物」では「死一倍」という借金制度に対して又、「慰み改て咄の点取」では、安易に出家してしまう当時の社会気質を批判しているのである。さらに、「旅行の暮の僧にて候」は一見すると主人公小吟に対する批判であるが実は、彼女を通して、金銭のためには、敢て悪行を重ねるという元禄社会の風潮を批判しているのである。

このように、テーマが社会批判に移ってしまい、孝道に対する教訓性は薄くなっているようである。

では、(ハ)の西鶴自身の孝道観が述べてある言葉について考えたい。

「忽じて、女の一生に、男といふ者、独りの事なるに。其身持あしく、さられて。後夫を求むるなど、すゑ〳〵の女の事なり。人たる人の息女は、たしなむべき第一なり。縁結びて二たび帰るは、女の不孝、是より外なし。もし又、夫縁なくて、死後には、比丘尼になるべき本意なるに、今時の世上、勝手づくなればとて、心のさもしき事よと、偽りを商売の仲人屋も、是は、真言をかたりぬ」（巻一の三「跡の剝たる娌入長持」）「家栄へ、家滅ぶるも、皆これ、人の孝と不孝とにありける」（巻二の四「親子五人仍書置如ゝ件」）

前者は、加賀で美人絹屋と呼ばれた主人公小鶴が、まわりがちやほやするのを良いことに、何度も出戻っては嫁ぎ、親兄弟に並々ならぬ迷惑を掛けた挙句、とうとう最期は、「花に見し形は、昔に替り、野沢の岩根に寄添、身比羅のごとくなりて、死ける」という惨めなものである。

当時は、もちろん儒教思想が盛んであり、先に述べたような西鶴の言葉は、女性の正しい生き方として、最も奨励されたことであろう。西鶴は、そこで、このような生き方

をしないと、小鶴のように野垂れ死にするのが、おちであると、厳しい調子で語っているわけである。そうした点から考えると、この言葉には、十分に教訓性を含んでいると考えて差し支えはなかろう。

「親子五人仍書置如〻件」は、結びの言葉通り、父親の遺言さえ、素直に聞いていれば、今まで通り、兄弟四人それぞれが幸せに暮らせたはずであり、それをしなかったがために長男の妻子まで巻き込んで、血の海の惨劇となったわけである。それだけの背景を考えあわせると、この短い結びも重みを増してくるようである。また、この言葉は、「世に天性の外、祈らずとも、夫〻の家業をなし、禄を以て、万物を調へ教を尽せる人」という序文とも呼応している。したがって、教訓性もよく感じとることができるのである。

以上から、教訓性の薄いものも見受けられたが、全体としては、儒教思想等の影響を受けた内容が見受けられ、その点から、西鶴の教訓的意図を読み取ることができるのである。

さて、談理・教訓的な創作意識を明らかにした上で、戯作作者としての西鶴の創作態度を考察したいと思う。

まず、二十話構成の視点から考えてゆきたい。先に述べたように、「本朝二十不孝」は諸国咄形式をとっており、その範囲も日本全国に広がっている。数の上では、圧倒的に本州が多いが、中でも近畿地方の占める割合が最も多い。これは、西鶴が大阪人であった関係からと推測される。しかし、この点を除いては、全国各地にまんべんなく話が設定されており、諸国咄形式が充分利用されている。

又、女性が主人公又は深く関わっているものが各巻に一話ずつ配置されており、ここにも読者を退屈させまいとする西鶴の工夫が窺えるのである。

さて、「善悪の二つ車」（巻四の一）では、備中屋の甚七と金田屋の源七という友人同志が、それぞれの身代を喰いつぶし、家族を路頭に迷わせて、備前岡山に逃げのびる。そして、心学が盛んな土地柄を利用して、それぞれ、野臥の非人である老人を父親に仕立て乞食をして生計をたてるのである。その際、源七は老人を優しく扱うのに対し、甚七は、反対につらくあたる。結局、源七はそのおかげで召し抱えられ、甚七は野たれ死にしてしまうという設定である。

このように、孝と不孝とを対照的に描くことは、説話を盛り上げるのに効果的であると思われる。この対比法を用いているものを表にすると、次のようになる。

巻数	題名	不孝者	孝行者
巻一の二	大節季にない袖の雨	文太左衛門	文太左衛門の妹
巻二の四	「親子五人仍書置如ㇾ件」	(次男)(三男)(四男)善助・善吉・善入	善右衛門(長男)
巻三の一	娘盛の散桜	乙女(五女)	(長女)(次女)(三女)(四女)お春・お夏・お秋・お冬
巻四の四	本に其人の面影	八弥	作弥
巻五の一	胸こそ踊れこの盆前	小さん	小さんの兄嫁

右表より、各巻に一話はこの方法が使われていることがわかる。

以上より、西鶴は、二十話が単なる不孝咄の羅列にならないように構成に細かい配慮をしており、この点から、戯作作家としての西鶴の創作態度が浮かび上がってくるのである。

次に、先行作品引用方法から西鶴の戯作意識を明らかにしたい。

西鶴は、「西鶴諸国ばなし」の序において「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」と書いているが、その姿勢は、「本朝二十不孝」でも窺うことができる。そこで、ここでは各氏の論考を参照しながら、それらの関係を表にして考察したい。注三

先行作品	本朝二十不孝
十孝二四 ①「漢文帝」	「今の都も世は借物」(巻一の一)
②ア「黄香」	「大節季にない袖の雨」(巻一の二)

二十四孝	②イ「孟宗」 ③「丁蘭」 ④「田真・田広・田慶」 ⑤「王祥」 ⑥「郭臣」	「大節季にない袖の雨」（巻一の二） 「当社の案内申程おかし」（巻三の四） 「親子五人仍書置如ゝ件」（巻二の四） 「木陰の袖口」（巻四の一） 「我と身を焦す釜が渕」（巻二の一）
本朝孝子伝	⑦「小串村の孝女」 「完粟孝女」 ⑧「川井正直」 「朱百年」	「跡の剝たる娌入長持」（巻一の三） 「八人の猩々講」（巻五の二）
柳田国男「日本昔話名彙」	⑨「赤淵の朱」	「心をのまるる蛇の形」（巻三の三）
今昔物語	⑩「震旦周代伊尹子伯奇死鳴報継母怨語」	「木陰の袖口」（巻四の三）
遺拾物語	⑪「慈覚大師入巓巓城行事」	「人はしれぬ国の土仏」（巻二の三）
宇治物語		

紙面の関係で、内容の対比は省いたが、それらから考察すると、先行作品が孝子譚の場合は、その場面情況をその

ま取り入れて説話を構成していることに気付く。この中で、「二十四孝」関連の作品では、逆設定をするのに題材の一部分のみを使っているという特徴がみられる。

例えば、「今の都も世は借物」（巻一の一）と「漢文帝」では、それぞれに子が親の毒見をするという場面がある。しかも、どちらもそれが毒見をする本人にとって重要な意味をもっているのである。

このように、孝子譚の逆設定という方法を用いている反面、「心をのまるゝ蛇の形」（巻三の三）と「人はしれぬ国の土仏」（巻二の三）は、「怪奇譚としての興味にひかれて、主題を見失っているかのような観を呈した作品」[注四]と指摘されている。確かに両者とも全篇を通して不孝咄というよりも怪奇譚という印象である。しかも、「人はしれぬ国の土仏」と『宇治拾遺物語』百七十「慈覚大師入纐纈城行事」を比べると、前者は、渡唐の僧に、事の成り行きを説明している設定で、そこでやっと、この物語が親不孝咄であることに気付くという具合である。その点からも確かにテーマからはずれかかった作品といえるかもしれない。

しかし、前田金五郎氏が、当時、ポルトガル船が伊勢に漂流したという史実をつきとめた結果、この一篇は「『宇治拾遺』の一説話に、ニュース種を取り合わせて説話を構成したものである。」[注五]と指摘しており、この話に関する限り、ある程度、題材が先行した上で不孝咄が創作されたのではあるまいか。

以上から、西鶴の先行作品使用方法とは、孝子譚については、逆設定を用いながら、又怪奇譚についてはその内容を引用しながら、筋をまとめ上げたとみることができる。このことは、教訓意識をもちながらも、内容を興味深いものにしたいという西鶴の戯作意識のあらわれと受け取って良いと思う。

それでは最後に「本朝二十不孝」二十話の主人公像から、西鶴の戯作意識は窺えるであろうか。ここでは、彼等の人物像を明らかにする為に不孝原因を調べてみた。そして、それらは大別すると、

(1) 生まれついての悪人で、特に原因なし。
(2) 生い立ちや環境の為に親不孝をしてしまうもの。
(3) 何か人為的な原因によって親不孝をしてしまうもの

三種類となる。

(1)の代表的な話として、「大節季にない袖の雨」がまず挙げられるのであろう。主人公文太左衛門は、自分の感情のまま七歳の妹を投げ殺し、意見する母親を蹴り立てて腰ぬけにしてしまう。さらには、もう一人の妹が自ら傾城屋へ身を売った金を持ち出して逃走する。それが原因となり、両親は心中して、亡骸は山犬の餌食となるのである。これは、二十話中でも、一、二を争う程の惨酷な話であるが、なぜ文太左衛門がそのような人間になってしまったのかについて、一言も述べられてはおらず、全く原因がわからないのである。文太左衛門と同じように生来の悪人と思われるものに、「我と身を焦す釜が渕」の五右衛門、「旅行の暮の僧にて候」の小吟、「心をのまるゝ蛇の形」の武太夫、

「当社の案内申程おかし」の金太夫、「木陰の袖口」の万太郎、そして「胸こそ踊れこの盆前」の小さんがいる。

このように原因も明らかにせずに、強い調子で親不孝をする彼等に対し、志賀直哉は、『暗夜行路』で「図太い」と表現し、驚嘆しているが、暉峻康隆氏はこのことについて、作家が素質として持っているデスペラートな精神が、この図太さの原因であると指摘している。[注六] もちろん、その中には、「二十四孝」をはじめとする孝子譚や説話等の先行作品が骨子となっているものもあるが、その際、不孝を行なう人物や不孝内容等は、新たな西鶴の創作分野であったことは言うまでもないだろう。

次に(2)の生い立ちや環境に原因のあるものについて考えたい。「今の都も世は借物」の笹六は、自分の放蕩費につまると、父親が亡くなった時点で二倍の金額にして返す、「死一倍」を借り、果ては父親を毒殺しようとまでする不孝者である。内容の惨忍さにかけては先の「大節季にない袖の雨」の文太左衛門にも並ぶような人物であるだろう。しかし、結びの部分で、西鶴は、「欲に目の見えぬ、金の借手は、今、思ひあたるべし」と述べ、死一倍という借金制度を批判しているし、笹六自身、放蕩三昧を黙認された世間知らずのお坊ちゃんであるが故に、まわりの人々から良いように利用されるのである。

この笹六と似たような人物として、「跡の剥たる娌入長持」の小鶴、「慰み改て咄の点取」の塩屋の某の長男、「娘盛の散桜」の乙女、「八人の猩々講」の墨屋団兵衛、そして「無用の力自慢」の才兵衛がいる。西鶴は彼等を描くことによって、当時の社会風潮をも浮き彫りにさせたのである。

(3)の何か人為的な原因によって親不孝をしてしまうものは、もともと、親孝行で好人物であったが、突然転落し、親不孝をしてしまうという運命が描かれている。「人はしれぬ国の土仏」の藤助は船乗りになったことが転落のきっかけとなっているし、「親子五人仍書置如件」の親の見栄をはった遺言状や、「先斗に置て来た男」の賭け事、また、「枕に残す筆の先」の息子の嫁の家出等に、それまでの安楽な生活を壊す原因がみられる。親孝行だった人物も、少しのきっかけでどうなってしまうかわからない運命に翻弄される人物を西鶴は描こうとしたのである。

以上のように、西鶴は、さまざまな視点から、いろいろな人物を創作している。「二十四孝」をはじめとする先行の孝子譚では、登場人物達がどれも類似していて、読者を退屈させることは否めない。西鶴も、その事実を認識しており、自分の作品は、そのようなことのないように、戯作作者として十分に注意を払った。その結果が、諸国咄形式や二十話の配置方法となってあらわれ、先行作品の引用に気を配り、登場人物にもさまざまな変化をもたせたのだと思われる。

※

世は、まさに孝道奨励時代。その中でいきなり、不孝咄を集めた本作品は、異色の作と言って良いであろう。しか

し、西鶴は、教訓を行なおうとする創作意識は有していたのである。又同時に、戯作者西鶴としては、読者にどれだけ面白く読んでもらうかという細かい注意も忘れなかったのである。

注一　尾藤正英　『日本の歴史19』　「元禄時代」　小学館

注二　谷脇理史　『本朝二十不孝』論序説　『日本文学研究資料叢書西鶴』　有精堂

注三　①～⑤、⑦、⑧矢野公和　「『本朝二十不孝』論―アイロニイとしての孝道奨励について」『国語と国文学』昭48・6
⑥横山重・小野晋「本朝二十不孝」解説　岩波文庫
⑨⑩水野稔　「西鶴発掘―『二十不孝』一、二の素材について」『国語と国文学』昭24・7
⑪前田金五郎　「西鶴散考」―伊勢船漂流記　『西鶴論業』―中央公論社

注四　注三⑥に同じ

注五　注三⑪に同じ

注六　暉峻康隆　『西鶴評論と研究上』―中央公論社